「老いが訪れ、病に倒れたとき、自立を助けてくれる人と縁を結ぶことが、何より大切な“終活”です」

ここ数年、終活がブームとなっている。エンディングノートを書く人も増えてきた。そうした中、葬儀や供養が、ファイナンシャル・プランニングの項目の一つになっている。「人生の終末」に対する人々の価値観が変容する背景として、急激な少子多死社会の進行と日本人の死生観を見逃してはならない。将来の「死」に備えて私たちが取り組まなければならない課題について、第一生命経済研究所主席研究員の小谷みどりさんにお話を伺った。

編集部=聞き手・構成　大野真人＝写真

第一生命経済研究所　主席研究員
小谷みどり 氏
Midori Kotani

2040年のピークに向け少子多死社会が進行している

――ファイナンシャル・プランニングの世界では、高齢期の介護・医療、相続などが話題となる機会が増えてきました。終活という流行語に端的に表されるように、終末期の生き方を考える人も増えています。

一方、直葬、家族葬、散骨、合葬、樹林葬など、近年、葬儀や供養のあり方が大きく変わってきていることもあり、自分や家族にとっての最適な「死出の旅路」をどう考えるかは、人生をより良く締めくくるために重要な課題となっています。

そこで今回は、生活設計論、死生学、葬送問題をテーマに精力的に研究活動に取り組まれている、第一生命経済研究所の小谷みどりさんに、終活の課題についてご教示いただきたいと思います。

小谷　人の死や死生観を掘り下げる「死生学」という学問は、世界でも新しい領域の一つです。ただ、多くの宗教では古くから「死後の世界」について言及してきましたし、死にまつわる問題は、医学、哲学、歴史学、民俗学などさまざまな領域で研究されてきたテーマでもあります。

少子高齢化が進むわが国において「死」というものを社会の問題として捉える試みは、これまでそう多くはありませんでした。一方、少子高齢社会というと、年金や医療などの社会保障に人々の注目が集まってきました。ところが、少子高齢社会のその先にあるのが「人の死」です。そして「人の死」はあらゆる人に訪れる出来事です。